

## 北上の人の強さ

### I 薄れゆく震災の記憶

・私は今回の FS で初めて北上町に来たが、FS メンバーの中には去年も参加した人がいた。彼女らは去年よりも工事が進んでいる印象を持ったらしい。しかし私から見るとまだまだ震災の爪痕が残ったままになっている状態だった。また、北上に住む高齢者の A さんは、「まだ復興が全然進んでいないのに工事のためのトラックが、東京オリンピックのために使われ、北上では少なくなってきた」と語った。復興は少しでも進んでいるとはいえ、依然として被災地で満足に暮らすことができていない方々もいるのに復興を遅らせるような状況になりつつあることにやりきれなさを感じた。

・今回はにっこりサンパークという仮設宿泊施設に泊まった。そこには布団などきちんとした寝具はなく、座布団やエアーマットのみで普段の自分の生活とはかけ離れた環境で四泊した。初日の夜、慣れない環境のため実際に寝ているときに不安を感じたが、震災当時は被災地の方々はこんな状態が何日間も続いたのだと想像すると不安でたまらなかった。震災から四年経った今、この体験をすることが出来たのはすごく貴重だったと思う。もう四年も経ったこと、それから震災の記憶を忘れかけていたことを身をもって実感した。

・中学生の H 君は初めて会った時からとても元気で、やんちゃ坊主とも言える子だった。初めは彼のテンションについていけず、なるべく彼を避けるようにしていた。しかし、彼の母親から彼のことを聞いて、私は自分の行動を反省した。震災によって H 君の家族はバラバラになり、H 君の兄弟も北上を離れてしまった。私たちのようなたまに来るボランティアと触れ合うことが彼の寂しさを紛らわせていると知った。それからは彼と積極的にコミュニケーションを取ることで距離を縮めることが出来た。彼の今の夢は、ベッドとテレビのある自分の部屋を持つことだという。私から見れば当たり前のように思えることを夢見ている子が今現在もいると知って、復興はまだまだ進んでいないと強く感じた。

・N さんは、自分がまさかこんな未曾有の大震災に巻き込まれて避難所生活をするようになるなんて夢にも思っていなかったし、テレビのニュースの中だけの話だと思っていたと語った。それを聞いて、近年予想されている関東直下型地震に巻き込まれる可能性が限りなく高い地域に住んでいる自分は、まさに N さんと同じ状況になるかもしれないと思って恐怖を感じた。東日本大震災をきっかけに知られるようになった「津波てんでんこ」という津波の危険が迫っている時の避難時の教訓がある。これは津波から逃げる際に自分の身を守ることをだけを考えて行動し、自分で移動することの出来ない誰かを助けに行ったり戻

ったりしては行けないというものだ。これは一見残酷なようだが、多くの人命を救うことを第一に考えた時にとっても重要になる考え方だ。もし、自分に津波の危険が迫ってきたらこれを本当に実践することが出来るだろうか。自分が震災に巻き込まれたらどうなるのか。考えさせられることばかりだった。

## II 北上の人の強さ

・Nさんは震災を通して、「今まで出会わなかった人・ボランティアと知り合えたことが本当に嬉しくてありがたい。もちろん震災は起こらなければ良かったということは明らかだけれども、震災が無ければこんな素敵なお出会いは無かった」と語った。私にとってこの言葉は衝撃的だった。震災が起こっても良いことなんて一つもないだろうという自分の中の固定観念が崩れた。そして、ボランティアにして欲しいことを尋ねると二点挙げて下さった。一つは自分たちの震災の話聞いてほしいということ、二つ目は震災とは関係ないボランティア自身の話を聞かせてほしいということだった。これも意外な言葉だった。私が想像していた、物資を支援してほしいというような物質的なものではなく、コミュニケーションを取ることで得られるような精神的なものだった。こうしたNさんのボランティアに対する思いを聞いて、自分の中でボランティアに対するイメージが変化していった。自分が想像していたよりも、もっと気楽に積極的に行うことが大事なんだと感じた。また、明るく元気で強さを持っているNさんは素晴らしいと思った。

## III 復興とは?ボランティアとは?

・Nさんは、仮設住宅を完全に出ることが復興の一つの基準になると語った。震災が起こる前の状態に元通りにすることは不可能であり、復興は0か100ではないということだ。そういう意味でどのように復興するのかを考えるのも困難で、複雑である。したがって、「復興」とは「復興」ともいう。

・今回のFSに関わって下さった北上の方たちは本当に優しく、都会にはない人間の温かみを感じた。しかし、先生がおっしゃっていた北上の方々の独特の性質や深い人間性があまり見えてこなかったことが心残りだ。ボランティアは一回行くだけではなく、また行くことで、得られるもの、見えてくるものがあるのかもしれないと感じた。